



1月1日現在の中山	
世帯数	1,347
人口	3,505
【問い合わせ】 中山公民館報編集委員会 58-5822	

地域で受け継がれていく三九郎

1月中旬、中山地区の各地で三九郎が行われました。

●三九郎の起源

正月飾りの松飾りやしめ縄を一か所に集めて焼く火祭り行事は全国的に行われていますが、松本地方では三九郎と呼ばれ親しまれています。

行事の起源は平安時代の宮廷行事である左義長だと言われています。左義長は、3本の竹、あるいは木を結んで三脚にして、その下で食物を調理して食べていたそうです。長野県下では道祖神祭りとして結び付けられ、病や災難を焼き払い、家内安全や幸せ、その年の作物の豊作などを祈念する行事として現在まで受け継がれています。

●昔の三九郎

古くは男子の子供仲間の行事として子供中心に行われて

いました。

三九郎に使用する材料はどの山からでも自由に切つてよいという習わしがあり、誰からも咎められることがな



かつたそうです。

かつては小正月である1月15日に合わせて行われていた。道祖神の前や付近につきり、2日間や3日間にわたって焼きました。

●最近の三九郎

近年は生活スタイルの変化に伴って、1月中旬の連休に合わせて行う地区がほとんどです。

内松集めと外松集めの2回に分かれていた松集めは1回にまとめられています。安全面などから畑や田んぼに立てられるようになり、昔のように数日にわたって焼くこともなくなりました。子供の数が少なくなってきたこともあり、男女関係なく大人も交えて行事を支えています。

●三九郎の未来

2年前に行われた公民館主催の三九郎講座で、高田充也先生は、「伝統を受け継ぎ、大人たちが子供に三九郎の意義を教え、お互いに理解し合って行われる三九郎祭りであって欲しい」と語っていました。

1月10日(日)の中和泉常会の三九郎当日には、まゆ玉を柳の枝につけ、三九郎の火で焼いて食べる姿が多く見受けられました。この風習は時代が変わっても同じように行われています。

未来の中山を支えていく子供たちに三九郎を受け継ぎ、変わらぬ姿で伝統行事を伝えていってほしいものです。



34回 続

中山小学校の手作り教室

中山小学校では毎年、子ども会育成会と共に、手作り教室を開催し、全校児童でしめ縄作りに取り組んでいます。昨年12月18日には、24名の地区のお年寄りの協力を得て、低学年は縄ないを、中学年はしめ縄づくりを、高学年はしめ縄と輪じめづくりを、習いました。

どの教室でも、子供たちがお年寄りを囲んで、時々手伝ってもらいながら、楽しそうに縄をなっている様子が印象的でした。



棚峯町会そば打ち講習会

棚峯町会では、年末恒例のそば打ち講習会を12月6日に開催し、20名近くの参加者がありました。



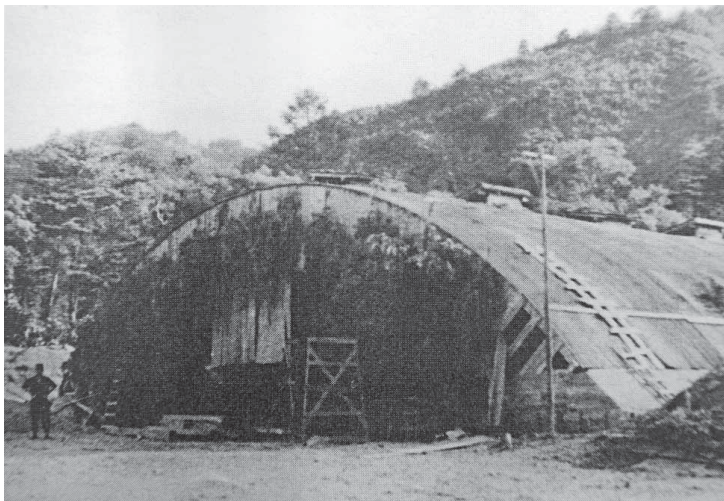
以前は町外から講師を招いての講習でしたが、昨年から同町会のそば打ちサークル「みやび会」のメンバーが講師を務めています。数人のグループに分かれての講習がマンツーマンに近く、わかりやすいと参加者からも好評でした。打ち上がったそばは半量を持ち帰り、講習後は全員でメンバー自家製のそばつゆで試食をして新そばを味わいました。参加者からは「いつも買っていたそばが物足りなくなりました。」「蕎麦は三たて」というだけあって打ちたてのそばは格別だったようです。

6回シリーズ 小松 芳郎

中山の今昔 ④

戦時下の軍事工場の建設

「二山の工事場は、大変出きました。あそこへ朝鮮人や中国人が大勢来しました。その人たちの宿舍の畳が学校の体操場へ2000枚くらい来ています。この村の大きな家の蚕室は、軍部で使われるようになりましした。内地が決戦場になった今、私たちは、食糧増産にはげみます。米英撃滅



二山に建設された20m×30mの半地下工場。左隅の人物と建物をくらべてみてください。設計を依頼された池田三郎さんの撮影です。

この軍事工場は、三菱重工工業株式会社(名古屋)の航空機工場が空襲にあつたため、松本へ疎開して建設されたものです。2月に、松本市域の既存工場や学校への疎開が計画されましたが、戦況が危うくなった4月、山間地

帯に再疎開させ、陸軍航空本部の管轄のもとに、地下・半地下工場の建設をはじめたのです。手紙にもあるように、半地下工場完成後には、工員の宿舍を中山に新築する計画で、それまでは中山の蚕室を利用しようとしたのです。私(小松)の家の蚕室も2階だけ工場へ貸すことにし、8月1日から1年間、20人ほどの工員が宿泊するという契約をしていますが、中山村では10軒くらい蚕室を提供したとのことでした。

工事は終戦までの約5か月間実施され、完成間近の地下・半地下工場もありましたが、航空機の部品製造の作業まではいりませんでした。8月20日には日大生が帰り、9月は工場付近のかたづけに児童が動員されました。中国人が帰国したのは11月27日のことです。中山文庫のすぐ脇に、この軍事工場のことを記した中山地区の戦争遺跡記念碑が、松本市によって建てられています。

この時期は、朝晩は特に寒く、布団からなかなか起きられませんが、私はある所で、ホテル仕様の枕を買って使ってみました。とても心地がよく、よく眠れて、余計に起きられなくなりました。良い枕を探していた私にはピッタリとフィット。暖かく眠るためにも、枕を変えてみてはいかがでしょうか。(T・K)



の日まで頑張りましょう。」昭和20年7月16日に、中山村の12歳の女子学童が、九州入院中の22歳の兄にあてた手紙の一節です。

中山地区では、20年4月から半地下工場の建設が始まりました。陸軍、三菱重工工業株式会社、熊谷組、技術系の大専門学校の学生、勤労動員による松本市周辺や県内外の人びと、中国人、朝鮮人、中山国民学校生徒などが動員されました。中国人500余人は、俘虜として特別な場所

猫つぐらを作ろう



地域づくり協議会が地域活性化事業として取り上げた「猫つぐら作り」の公民館講座が10月24日から開催されました。

猫つぐらは、ワラが素材であるため、米を作っていてワラが豊富な中山地区にはびつたりの工芸品です。私も冬の仕事にと思い参加しました。

講座は、下里光昌さん(壇原北)を講師に招き、初めは2回の予定でしたが、応募者が定員20人の2倍以上いたため、急遽回数を増やして行うことになったようでした。



猫つぐら作りは、ワラを一本一本整え、素材作りをし、それを一段一段編んでいく大変な作業でしたが、下里さんご夫妻の丁寧な指導や、家に帰ってからの地道な作業の継

続で、何とか2カ月ほどで完成させることができました。その後も、猫つぐら作りが病み付きになり、家で時間を見つけてながら、2個目を製作しているところでした。他の参加者も、「形ができてくると、とても感動する」「夫婦の楽しみが増えた」「とても大変だが、あの作品を自分で作れるなんてすごい」など、各々やりがいを感じているようです。地区内での猫つぐら人気も急上昇しており、今後中山の工芸として盛り上がっていく可能性を感じるとともに、こういった活動が地域や住民の活性化につながっていくことを期待しています。